

第11回

合格するための“コツ”総集編 ——秘伝のタレも自力本願

あお くに まさ やす
青谷正妥

京都大学留学生センター



ふだんの勉強は基本の基本

最近、秘伝のタレや達人の秘策がマスコミを賑わしていますね。「秘伝」とは、「秘密」にしておくのか「伝える」のか、どちらだろうと馬鹿正直な理系の疑問で辞書を引いてみたところ、「特に秘して特定の人以外には教えないこと、また、その事柄」とありました。今月は不特定多数の読者の皆さんをその「特定の人」にしてあげましょう。もっとも、駄策の集合体の一つ一つきっちりとするのが、わが秘伝の策なのですが…これまでの要点のまとめとスペースの関係などで書けなかった内容の落穂拾いです。

日本の大学教育は、先進経済圏で最低といわれます。「講義がデタラメで学生が怠け者」が改まらない限り、来られる側のアメリカも迷惑でしょう。懸命に勉強をして、GPAを高く保つのが当たり前のアメリカ人と競争するのに、同等の努力がなければ始まりません。第7回で、低いGPAを特殊事情として説明する話をしましたが、いかに説得力のある言い訳でも、最初から言い訳の必要がない高いGPAには及びません。留学前から、アメリカの大学生のように真摯な日常の勉学に勤しむことがステップゼロです。



英語は数年間・数万時間をかけて

4歳児に「ねこふんじゃった」は誰が踏んだのかと尋ねると、「ねこ」という答えが圧倒的です。ところが5歳児は、「ぼく」「おとうさん」「おじさん」「くるま」と口々に答え、「ねこ」という子はもういません。5歳児は日本語のなん



たるかを知っているのです。この例になぞらえると、日本の大学生の英語力は表層的で明らかに4歳児レベルです。そして、このレベルに止まっている限り、暗示的な内容を頻りに尋ねるTOEFLで高い得点を上げることはできませんし、アメリカで不自由なく勉強・生活することもできません。

それでは5歳児になるにはどうするか？ 正攻法は5年間勉強することです。スポーツでも言語でも対象の如何にかかわらず、熟練状態 (expertise) を達成するには、10,000時間単位の訓練が必要です。第9回の現有戦力内で短期にTOEFL高得点という話は、当然正攻法ではありません。大学4年間でじっくりと力を付けてください。



推薦状と出願理由書の重みを知れ

重要な書類は推薦状 (letters of reference, letters of recommendation) と出願理由書 (statement of purpose) だということを再確認させてください。入学試験の国、日本では、テストの点ほど大切なものはありませんが、アメリカ留学関連の試験で、ほんとうに大切なのはTOEFLだけで、GREの点の重みは日本の入学試験の比ではありません。

推薦状では、必ず推薦者と志願者の関係を探ねられます。第6回で述べましたが、授業を取っただけというような希薄な関係では意味がありません。卒業研究の指導教官以外にも推薦者が必要ですので、ふだんからそういう人を見つけておく必要があります。最低限、同じ教官の複数の講義を受けてよい質問をし、よい点を取って顔を覚えてもらう

ことぐらいはやるべきですから、ここでも1年生のときからの長期計画が必要ですね。分野の近い先生の研究分野について尋ねたり、論文を紹介してもらったりするのは、おおいに自分の勉強にもなり一石二鳥ですので、とくに奨励します。

時間をかけて相手の大学を研究することも忘れてはいけません。少なくともホームページを隅から隅までチェックするくらいのことはしましょう。人間ほどではありませんが、大学を知るのにも時間がかかります。1年生からresearchを始めても、決して早すぎることはありません。何度も詳細をチェックし、ほかの大学と比べていくなかで、大学像やその大学が学生に求めているものが徐々に見えてきます。Statement of purposeは一種のlove letterです。このようにして入念に選んだ大学でないと、あなたに惚れ込ませるような力のある文は無理でしょう。



とにかく自分を知ってもらう

アメリカ人は論理的だから、当然大学院のadmissionにも客観基準があるのだろうと考える人も多いようですが、実際は主観や勘や経験に支配された非常にあいまいなプロセスのようです。そういうものを調べることはできませんが、知り合いの先生が推薦する学生とか、よく知っている学生とか、ある種の縁故採用のようなものもあるのかもしれません。たとえば私学では、「この大学をでた親族はいますか?」と露骨に尋ねるところがあり、外国人にはあまり気持ちのよくない質問ですね。いずれにせよ、よい大学であればあるほど、まったく知らない大学のまったく知らない学生がまったく知らない学者の推薦状をもって突然出願してきても、入るのは難しいといわれています。そういう意味では「知ってもらう」ための大学訪問もよいと思います。なかには向こうでsummer researchなどをさせてもらう豪傑もいます。

僕の主観的・独断的アドバイスは以下のごとくです。

トップレベルの大学の場合、一番有効なのは向こうを知っている人に紹介状を書いてもらうことで、1人で押しかけても表面上の歓迎に終わることも多いと思います。選考が終わったあとでできると思った学生を、費用はすべて向こうもちで招待してくれることはあるのですが、出願前に押しかけてくる学生の受け入れ態勢は、必ずしも



それは無理

秘伝・秘策・匠の技など、いかにも効能の高そうな表現、さらには裏技など、これさえ知っていればすぐに誰でもできそうな特効薬、巷に溢れるそういう話に踊らされる大学生の多いこと。僕のところにも「ろくに勉強しなくてもTOEFLで高得点」とか「学部の成績がひどくても一流大学の大学院に留学」とか「1年間の勉強で英語運用能力を完成」とか、アリエナイ秘策と裏技の相談に来る人があとを絶ちません。

しかし、僕の学習者・教育者としての匠の技をもってしても、超常現象は無理です。へきえきした僕が、「『青谷が女子高生にもてる(本当です!)ワケ』とか、もっと熱く語れる質問をください」とジョークでかわそうとすると、「天変地異にワケなんてない」と一蹴。他力本願の坊やたち、自力本願のカッコかわいい(?)おじさんを怒らせるんじゃないよ。人をけなす前に結果をだそうね、結果を。

学びても なほ学びても 学びても

学び足らぬは 学びなりけり

(新渡戸稻造の短歌のパロディー：本歌は「勤めても」)

整っていないと感じます。僕はたまたまついでがあつて、HarvardとCaltechを訪問したのですが、むしろ戸惑っている感じすらありました。とにかくトップ大学の先生は超多忙ですから、その理解がないと悪い印象を与えるおそれもあります。その反面、偶然Harvardに客員でおられたUC Berkeleyの先生は、懇切丁寧に應對してくださったので、運も含めcase by caseですが。

一方、1.5流以下の大学では、だいたい学生が出願前に見にくることも少ないのか、また、なかなかよい学生が取れないためか、訪問者を歓迎してくれる確率が高いようです。これは一流大学の人気のない研究科や先生でも同じことです。僕はアメリカ留学前年の1978年の夏に、Maryland大学の大家教授を訪問したのですが、留学生だけが頼りのような研究グループだったので、見学だ食事だと大歓迎されたのを覚えています。人生いろいろ、大学もいろいろです。

「お行きなさい」